

山と博物館

第 5 卷 第 6 号 1960年6月25日 大町山岳博物館

雪男の足跡

慶大ヒマラヤ登山隊はダウラギリI峰(七、七五〇m)を目指して五、〇〇〇m以上の峠を三つも越えながらダウラギリI峰の Base Camp を目指して進んでいた。最後の五、四六〇mのムーラという峠を越えて行つた。峠を下り出した突端に下の方に峠の下りとは直角に足跡が一直線に続いていた。約一〇分後その足跡の所で吾々は熊とも雪ヒョウとも違う足跡を見つめていた。Sheep がイエティだ、いやミイティだと話合っている。我々は一しゅんいやな予感がした。今にも前方の岩壁あたりから誰れも見つたことのない様な何物かが現われて来るんじゃないかと……この写真がその足跡です。

一九五九年九月二八日撮影、撮影者慶大ヒマラヤ登山隊 加藤喜一郎氏



餓鬼岳のおもいで

袋 一 平

餓鬼岳にのぼったのは1940年9月15日であった。ちょうどふた昔になる。世の中のことはたいがい忘れてしまったが、山の印象はふしぎなもので、いつまでも新鮮なかたちで残っている。特にそのときの写真をながめるとまるできのうのうのできごとみたいに、情景が目のまえに浮かんでくる。

いちばんはじめに、滝ノ沢の写真がある。沢の兩岸からふたりの男が手を出し合っている。徒渉だ。どっちかがどっちかを引っぱってやるようとしている図だ。ひとりには私の従弟で、ひとりには風見武秀だ。三人づれで、葛湯泉を出発して、いま滝ノ沢にかかったところである。

いまこの登路はどうなっているのか。当時は乳川の道は通行不能ということになっていた。

滝ノ沢をのぼって1533メートルの独標が正午、乳川道との出合いが午後四時四十分、小屋着が六時半と私の山日記に書いてある。難行苦行のありさまがこの時間でわかる。もう秋だったから、最後の一時間ほどはランプで歩き、小屋も無人になっていた。そんなわけで、登りの写真はこれ一枚しかない。

16日は雨で停滞。しかし、夜に雨があがって、まんまるい月が出た。小屋のまえから雨あがりの月にけむる安曇野をながめたときの気持はいまも忘れていない。古い物語の中にあるような、人間の遠い祖先のいとなみの中に帰ったような、郷愁と哀感でもあったろうか。

小屋から正面にみた日の出の写真がある。雨はあがった。しかし雲海の向うの山なみの稜線にくっきりと全身を出した太陽は、なにか異常である。頂上の写真、小屋の写真、いずれもぼんやりと蒙気につつまれている。つまり、私たちにちょっとあいさつだけして、太陽はすくかくれてしまったのである。

それだけに、まっ黒な岩尾根を近景に、はるかに遠く浮かぶ槍の尖峰は魅力があった。

縦走路の写真はわりにたくさんある。九時半ごろ、本岳付近で、いったんまわりがあかるくなる。雲がまつわりついていて、しかも大きな展望がひらける。日本画の画題にでもなるような絶景だ。

唐沢岳のまるいドームの左に立山、右に針ノ木、また燕から大天井への稜線、ちょっぴりと槍のあたまのそく。足もとは遅い花、ハイ松、岩と岩。私たちはすいぶん長い時間、再びあたりが霧にとざされるまで、遊んでいた。

そしてそこには20年まえの私たちのすがたが刻まれて



朝霧の餓鬼岳附近

いる。

風見もヒマラヤへ行ったりして、その道の大家になったが、時折、社の餓鬼岳の話が出ると、また行ってみたいものだという。故国のおもいでのはやはり忘れられないのだろう。

私たちは雨に打たれて、東沢乗越からまた高瀬の谷へ下りた。私たちは燕へ縦走するつもりであった。だからその後、餓鬼から燕への縦走は宿題となり、念願となって、その季節がくると私の心をそそり立てる。唐沢岳を残してきたことも気にかかる。

そしていつも思っている。どうして人は槍への縦走を燕からはじめて、餓鬼からはじめないのか。烏帽子〜槍が大きな興味をひく一つの理由は、はるかに槍をみながら、すくなくとも2日の楽しい行程があるからではないのか。もし、そういう縦走を餓鬼からはじめれば、烏帽子〜槍のコースと同じ日程で、別の興味を満喫できるのではないか。しかも乳川の登路がひらけて、のほりやすくなったと聞いている。餓鬼の小屋のながめはすばらしいし、頭上三角点はほんの五分の距離にある。縦走路には、岩から森林帯までの変化もある。

古い写真帳をひらいて、私はいま遠いむかしの希望と感慨を、新鮮なものとしてなつかしくよみがえらせている。

餓鬼岳のあゆみ

金田 国武

昭和5年7月16日、乳川谷を溯った東京紅陵山岳会の江崎基六氏は、頂上間ぎわで雨にぶたれ、ビバークして帰る途中、魚止の滝の上流で丸太橋が滑ったため、濁流に吞まれて命を断った。後にも先にも餓鬼での遭難はこの一件で終止符をうつが、これによって各所からビュッテ建設の必要性が叫ばれ、今は故人になった大蔵長吉、大谷弥久次氏によって、昭和7年、頂上南面100mの這松地帯に3間に4間半の山荘が建てられた。

以後この山は孤独で静寂な山として、心ある登山家に愛されてきたが、間もなく永い暗黒時代入るにつれ小屋も閉鎖し、道は荒れほうだいとなってカモシカの巣と化していった。

——安曇野に鬼つつしが咲く頃、餓鬼の残雪はたまたまなく山恋いの情をかきたてる。

私達ときわらの青年数人が、白沢をつめてこの山に登ったのは24年の初夏のことであった。大阻の頭でカモシカ道が四方八方についているのでずい分迷った。熊笹の中をおよぐようにして後線を出たとたん、視界は一変して裏銀座連峰が西陽に紫水晶のように輝いて、大きな翼をひろげていた。

只息をのんだ私達は小屋へ入って二度びっくり。窓という窓はふっ飛んで枠さえ無く、雪の吹きだまりと這松の葉っぱで足の踏み場もない乱雑さであった。

ようやくそれを片つけて板を梁に並べて寝屋をつくと表で大火を囲んで水筒の35度をかたむけた。剣スリの岩を這い上るガスと真っ赤く燃えた烏帽子の空を見ながら「この山を世に出すのは地元のおれ達以外にないんだ」と山の靈感にふるえて口々に叫んだ。

道は三方より考えられたが、乳川は渡渉箇所が多いこと、道のりが長いこと、葛温泉からのコースは地型的に無理があったので距離的に一番短い白沢沿いに新道を開けることとなり、最初の道路修理に登ったのは昭和26年の7月上旬のことであった。

一週間ばかりかかって曲りなりにも道型をつくったが、木梯子の数が30以上もあるという前代未聞の新道がここに誕生した。そこで平林武夫先生の尽力で小屋を大谷氏から借り受けたが、あの骨組みきりの小屋をどうやって改修して小屋開きにこぎつけるかということが悩みの種となった。そこで常盤村観光協会の名で寄付を募り、各自の持ち寄りとして小屋を改修し、寝具、食器類一切をととのえておくれはせながら8月1日に山開きと決まって各所に発表した。前日は総出で頂上裏から雪を背負い薪を取り、白樺の額をつくってセガンチニーの画など

かかしてお化粧をすませ、ほっと一息ついたとたん、10人近く大町税務所の職員が見えて大あわてをしたことがある。

男だけの考えで、時間が少なくてすむと、米と雪をまぜて火にかけたら、底はこげつき上は生米になってしまった。その上明日でなければふとんが間に合わなかったので、毛布をありったけ客にかけて、一晚中火をたいて起きていたというエピソードもあった。

小屋番は一週間くらいずつ交代でつとめた。何は無くともこの山の気分を十二分に味ってもらおうと、客のヤッホーが聞えたら一人はお花畑まで迎えに行き、一人はシロップをコップに注いで山の音楽をかけてむかえることとした。夕食は小屋では面白くないので表の高台へむしろを敷いて四周を眺めてとってもらった。晩は枯木を集めて毎晩ファイヤーをたいて、みんなで歌ってもらった。

宝石をちりばめたような安曇野を見おろしながら、夜のふけるも知らず歌う若人が多かった。

山というものはいくら声を大きくして宣伝しても人が登るといふものでは無く、登った人の口から口へと連鎖反応をおこして増すものだと思うが、餓鬼も昭和26年8月15日には長野県登山部門の国体予選が開かれたし、営林署の協力によって道も序々に改修され、日一日と登山ブームの波にのるようになってきた。

私達、餓鬼の若いグループも家事や勤め先の責任が大きくなるにつれ、月の半分も山へ入っているわけにもゆかなくなり、大体独立採算の見通しもついたので31年からは一切の責任を或る個人にまかせていたのであるが、山は何時までも気高い孤高を保っているけれども、人はこの山をさえ利慾をはさんで争いの場と化すことがある。でも私達の任務は笑顔と引きかえに返されたのだ。そして年ごとに多くの人々から愛されるようになったことと豊かすぎるほど美しい夢を山からもらったことで十二分の報いも受けた。今年からは昔えかえって大谷さんに小屋の経営をしてもらうことになったが、この山の発展をねがう気持と何時までもそっとして置きたい気持と入りまじって愛する餓鬼岳にさよならをしたい。

なお道路修理に小屋番に無償で一生涯けんめいやってくれた仲間の一人、白沢教次さんが31年2月砥沢入りで営林署の仕事で殉職したが、最近餓鬼岳への登山路のほとりにささやかな殉職碑が建てられたことも、この山を愛する人々の心のどこかにせひとどめておいてほしいことである。

(大町市役所常盤支所)

山岳名を冠した植物(3)

寺島 虎 男

C. 白山火山帯 白山御前岳2702m、その他2山

No.	和名	学名	科名	属名	備考
6.	ハクサンオミナエシ (ハクサンキンレイカ)	<i>Patrinia triloba</i> Var. <i>gibbosa</i> Matsumura	おみなえし科、オミナエシ属		一名マルバキンレイカ 距短くて円く、フクロ状 長さ花冠の基部を越えず
7.	ハクサンサイコ	<i>Bupleurum nipponicum</i> Koso-poljansky	ミシマサイコ属		葉の基部両縁円く突出して 抱茎、大繖形花序は1-5 総苞片は1-3広卵形、小 総苞片は5-6
8.	ハクサンイチゴツナギ	<i>Poa kakusanensis</i> Hackel	いね科、イチゴツナギ属		葉鞘は竜骨を欠き葉舌は長 さ1mm位花序広卵形
9.	ハクサンオオバコ	<i>Plantago hakusanensis</i> , Kaidzumi	おばこ科、オオバコ属		葉は軟かく、無毛又は軟毛 を疎生、脈5-6 穂状花序は10-20花
10.	ハクサンスゲ	<i>Carex canescens</i> Linnaeus	かやつりぐさ科、スゲ属		稈は多少叢生、3稜形、 小穂は4-7個
11.	ハクサンチドリ	<i>Orchis aristata</i> Fischer Var. <i>unmaculata</i> Makino.	らん科、ハクサンチドリ属		葉は3-6倒披針形、花は江 紫色、唇弁は倒卵三角形、 花弁に2-3脈あり
12.	ハクサンジャクナゲ	<i>Rhododendron Fauriae</i> Franchet	つつじ科、ツツジ属		一名シロバナジャクナゲ、 葉は長だ円形、鈍又は円頭 基部は円又は心形、花冠の 内面に淡緑の斑点あり
13.	ハクサンコザクラ	<i>Primula Cuneifolia</i> Ledeb Subsp. <i>hakusanensis</i> . K.	さくらそう科、 サクラソウ属		一名ナンキンコザクラ、葉 は長さ3-8cm、巾1-2.5 cm牙齒は数多く、大小不整 巾せまい。
14.	ハクサンハタザオ	<i>Arabidopsis gcmifera</i> Makino	あぶらな科、ハタザオ属		葉は長さ3-8cm、 巾1-2.5cm
15.	ハクサンタイゲキ	<i>Titymalus togakusensis</i> Hara	とうだいぐさ科、 トウダイグサ属		一名トガクシタイゲキ
16.	ハクサンボウフウ	<i>Peucedanum mullivittatum</i> Maximowicz	せり科、カワラボウフウ属		根葉及び下部の葉は長柄あ り、3角形の広卵形、1-2 回3出に複生、総苞片小苞 片は0、小梗は10-20個
17.	ハクサン カメバヒキオコシ	<i>Isodon Kameba</i> Okuyama Var. <i>hakusanensis</i> Okuyama	しそ科、ヤマハクカ属		葉の頂片、幅広く大形で鋸 歯及び時に深欠刻あり
A. 関東中北部~南部					
1. 榛名山(1448m)上野					
1.	ハルナイタドリ	<i>Reynoutria sachalinensis</i> Nakai Var. <i>brachyphylla</i> Honda	たで科、タデ属		
2.	ハルナザサ	<i>Sasa Sakai</i> Nakai	たけ科、ササ属		高さ1m以上、葉の長さ20 cm幅10cm、柱頭3裂
3.	ハルナユキザサ	<i>Smilacina robusta</i> Makino et Honda.	すずらん科、ユキザサ属		
2. 妙義山(1104m)上野					
1.	ミヨウギモミジ カラマツ	<i>Trautvetteria Japonica</i> Siebold. et Zuccarini	きんぼうげ科、 モミジカラマツ属		
2.	ミヨウギシダ	<i>Polypodium Someyae</i> Yatabe	うらぼし科、エゾデンダ属		葉の基部に特に著るしく鱗 片あり、 子のう群は裂片上に中肋と 縁辺との中間に近く互に少 し間隔をおいて2列
3.	ミヨウギトリカブト	<i>Aconitum Suspensum</i> Nakai	おだまき科、トリカブト属		
4.	ミヨウギイワザクラ	<i>Primula Reinii</i> Var. <i>Myogiensis</i> Hara.	さくらそう科、サクラソウ属		

顕微鏡による岩石薄片の観察 (4)

堆積岩 太田昌秀

◎ 堆積岩を顕微鏡でみると、石英や長石などの角がすりへった丸みのある粒が集っていて、その粒の間を、細かくて何だかわからない黒っぽいものが埋めています。この位のことは、わざわざ顕微鏡でみなくても砂岩や泥岩を目を皿のようにしてよく見ると誰にもすぐわかることです。写真は出しません。(実は博物館が貧乏でお金が足りないそうですのでちょっとでも節約するために写真をのせられないわけです。)

◎ その代りに今回は、石灰岩の中の化石の写真をお目にかけましょう。

この写真にでてくる二つの虫は、フズリナ虫といって今から二億年位前の古生代の末(二疊紀、下部)の海に住んでいた原生動物の一種です。見てもわかるとおりこれら二つは別の属に区別されるものですが、この時代の海には、非常に沢山のこのような虫が生活していたのです。実物は大きくても0.5~1mm位のもので、馴れない人には山で見つけることはできません。この虫を含んでいる石灰岩を薄くすって薄片にし、顕微鏡でみると、写真のように殻の内部の構造がはっきりとわかりますので、生きた蛋白質こそありませんが、この遺骸から2億年も前のフズリナの生活や生理を考え、進化の様子をうかがうことができるのです。

◎ 堆積岩は、それらを作っている砂粒や礫の大きさ、丸さ、種類などを目安にして分類されます。その一番大きな区別は、陸成層と海成層です。陸成層は、砂漠の砂



フズリナ石灰岩の顕微鏡写真

山口県秋吉台産(下部二疊系)

上の種はQuasifusulina属のもの

下の種はTriticites属のもの(×20)

層、火山灰層、河の堆積物、湖沼の堆積物などをふくんでいますし、石炭を含むこともあります。陸成層の大きな特長は、粒の大きさが揃っておらず、層がはっきりしないことです。(湖成層では細かい層がよく発達します)

これにくらべて海成層は、土砂が沈積した海の中での場所によって相違はありますが、良く粒の揃った層理のはっきりした地層になります。海の底は、深さ数百米までのゆるやかに深くなる部分(大陸棚)、それが終わって急に深くなる所(大陸棚崖)、一様に深い海底(深海)という三つの部分に大きく分けられますが、大陸棚崖を堺にして、大陸棚と深海とは、そこに沈積する堆積物の様子が全くちがいます。

大陸棚では、陸地から運ばれてきた土砂や礫が、海水で粒を揃えられ、海流に運ばれていろいろな場所で沈積します。このときに、非常に細かい粒子は、コロイドのようになって海水中に浮び、深海にまでも運ばれて、ゆっくりと堆積して、泥岩などになります。この外、河の水は沢山の炭酸カルシウムなどの塩類を化学的にとかし込んでいますが、これらも、海に入ると、塩分の濃さに変化したり、海水の温度が変わると、化学的に沈積します。深海底には、このような、細かいコロイドや化学沈積物がわずかずつ、ゆっくりと沈積して、薄い地層を作っています。

その結果、大陸棚には、砂岩や礫岩を主とする厚い地層が発達し、深海には、泥岩や珪岩、石灰岩などを主とする薄い地層ができることとなります。これらの岩石を顕微鏡でみまると、大陸棚でできた岩石は、上にのべたように、粗い粒の間を細かい何だかわからないものが埋めていますが、深海でできた岩石は、全体が細かい粒子ばかりからなり、粗い砂粒や礫はほとんどありません。中には、化学的に再結晶して、堅くなったものもあります。

この外に、海岸でも、火山活動があって、沢山の火山灰が海水の中へ噴き出ますと、これが堆積して凝灰岩という火山灰層ができますし、暖かい海で、大きな珊瑚礁ができたりすると、大規模な石灰岩ができたりします。写真はフズリナを含む石灰岩で、山口県秋吉台の石灰岩体の一部です。博物館には、この石をみがいた標本がありますから、ごらんになって下さい。

(北海道大学理学部地質学教室)

中綱湖畔「黒沢高原」に 春の昆虫を訪ねて (2) 倉田 稔

春のチョウ、モンシロ、モンキ、

春のチョウで私達に最も親しまれているのはモンシロチョウとモンキチョウである。

私達はよく、白い蝶さえ見れば「あつ、モンシロチョウだ」と反射的に呼んでしまうが春の白い蝶の中にはモンシロチョウとスジグロシロチョウの2種類が混っている。この両種は、なれてくると飛んでいる姿を見た目で区別できるが、初めのうちは困難である。区別するにはやはり成虫をつかまえて、よく比較観察することが大切である。

モンシロチョウとスジグロシロチョウで 生活する場所が違う

モンシロチョウは前ばねの先端部だけが黒くなっているが、スジグロシロチョウでは前ばねも後ばねも全体に黒いすじがある。モンシロチョウは童謡にもうたわれている如く最も一般的な蝶で、好んで菜の花、大根の花にいかにも春の蝶らしくヒラヒラと訪れる。幼虫は青虫と呼ばれ主としてキャベツ科植物を食べ安曇平では1年に3回〜4回、卵→幼虫→蛹→成虫という世代をくり返して、晩秋に蛹となりそのまま冬越しに入る。秋の幼虫は大食家なのでキャベツの大害虫となり農家を悩ませている。

一方スジグロシロチョウは一年に2〜3回位世代をくり返すだけで蛹で越冬する。スジグロシロチョウ幼虫もモンシロチョウ幼虫と同じくアブラナ科植物を食べ成長するのであるが、モンシロチョウが主として栽培植物であるキャベツなどを食べて成長するのに対しスジグロシロチョウは主として同じアブラナ科の野生の植物であるタネツケバナやイスガラシを食べ成長している。このように食べ物がちがうので、モンシロチョウは主として平地部に多くおり、スジグロシロチョウは主として山間部に多いというようになっている。同じ仲間のチョウでありながらこのように生活の様式が違うのである。

中綱部落より登山路を登るにつれてこの変化もよくわかる。

高原の代表的昆虫、ギフチョウ

モンシロチョウが少なくなりスジグロシロチョウが多くなる頃になると登山路はいよいよ急勾配になる。右手に、左手にと移り変わる中綱湖を眼下に見ながら40分も登ると頭上に爺ヶ岳を持つ広大な台地が開けてくる。黒沢高原である。春の高原は淡白な美しさを一面にただわせている。

路傍に咲く一輪のカタクリの花が雄大なアルプスを背に可れんである。この花の咲く頃に春の女神に例えられているギフチョウが現われる。ギフチョウは黄色と黒のダンダラ模様でモンシロチョウ大のチョウで世界でもアジア大陸東部のみに分布するもので、日本では本州中部地方以南にのみ分布している。

長野県では北部県界と南部県界に分布する程度で珍しい蝶になっている。早春1〜2週間、成虫が現われるだけで、あとはずっと翌春まで蛹でねむり続けているのである。湿原内に群落を作っているキノジノカンアオイという、その昔徳川家の家紋であったアオイの仲間の植物を食べている。卵は真珠の如く美しいが幼虫は真黒の毛虫で卵の美しさや成虫の美しさとは比べものにならない。最近はこの蝶も、心ない採集家に持ち去られその数はめっきり少なくなった。自分の眼前から、こんな美しい天然の賜物をうばい去られる姿を見るのは本当に心苦しい。私達はこのような天然の落し子をいつまでもいつまでも護り続けなければならないのだが。

残雪深い雄大な鹿島槍や爺ヶ岳を背にした早春の高原に咲き乱れるカタクリの花上に展開される、このギフチョウの乱舞はさながら地上最大のショーとも例えられよう今年ももうその時期は過ぎてしまった。今は蛹となって落葉の下にねむっているであろうこの蝶の無事を祈って、そと湿原を通り過ぎるのである。

高原のトンボ、モイワサナエ、

湿原内を縦断して流れる小川には、本邦では北海道と東北地方から中部地方だけに棲息していると言われるモイワサナエがいる。長野県では軽井沢、志賀高原などが知られている。本格的な春の訪れる6月初旬には早くも幼虫(ヤゴ)は川辺の水草にはいり、春の陽を両翅にキラキラ反射させながら大空に翔かんとしている。赤トンボ位の大きさで、胴体は黒色と黄色のマダラ模様で飛び方はゆるやかである。成熟しきったトンボは高原の上空をゆったりと飛行し、いやが上にも山の中の高原の豊かさを満喫させてくれる。

間もなくレンゲツツジが一面に咲き乱れるだろう。こんな静かな山の中で、人知れず、営々と生命の継承にあきる事なき昆虫達にめぐり合った時の喜びは又格別なものである。君達よ、お前達よ元気に生きながらえてくれと祈る気持ちで再会を約束するのである。

(大町市立第一中学校山博学芸員)

信濃大町の白鳥物語 (2)

本州では古くからの渡来地として青森県の(こみなと)は特に有名で、1922年天然記念物に指定されている。その他秋田県の八郎潟、新潟県の瓢湖(ひょうこ)、島根県の宍道湖(しんじこ)など私たちの知るところである。今年の冬は全国的に渡りの数も多かったといわれ、今までに姿の見せなかった湖沼にもやってきて話題をまいた。(後述する諏訪湖に渡来した一群もその一例である。)またそれだけに近年になく全国的なオオハクチョウ密猟事件で新聞紙上で賑わしたこともいまだ耳新しい高島春雄先生(山階鳥類研究所)の話によると、渡来数も小浜は今年の一ヶ月、1242羽、瓢湖は例年2~30羽なのに本年2月に入って271羽近くなったといっている。その原因についても昨年の春から夏にかけてシベリアなどでハクチョウが繁殖しやすい条件がそろい、たくさんヒナがかえったのではないかと、例年より早く寒さがやってきたため、北の方にとどまっていたハクチョウたちがだんだん南に移り、日本に多くきたのではなかと二つの理由をあげて推測しているが、本当のところはわかっていないとのことである。

青木湖を訪れた一群も、諏訪湖を訪れた5羽のハクチョウもきっと安住の地を求めてきたのであろう。それとも渡りの途中にあったのだろうか。

さてこのようにして捕えられたオオハクチョウの飼育舎建設についても、苦しい地方財政にあっては色々と難問題があったが、やがて、駅前の小じんまりとした現在の水禽舎が設けられ、市民や旅行く人々の休息のひと時に、また待ち合い時間をオオハクチョウとともに過ごし、その周囲には人の絶えることを知らなかった。

オオハクチョウに始まり、各種北アルプス産の動物が逐次飼育される運びとなり、当時の博物館建設運動とあいまって、附属動物園が開設されることになった。実に博物館建設の親であり、大町へ文化の風を送り込んだ使いであったといえよう。ところが3月の31日夜突然死んでしまった。この知らせは少なからず、郷土の人々の心を痛めたのであった。さっそく国分寺にある国立衛生試験所に病性鑑定(結果はまだ報告されていない)を依頼し皮は剥製にすることになった。生前何日間もさがしたつれ合いと奇しくも剥製となって博物館展示室で再会しようとは誰が想像したことであろう。

日本各地で冬を過したハクチョウが北の国に去る季節がやってきた。

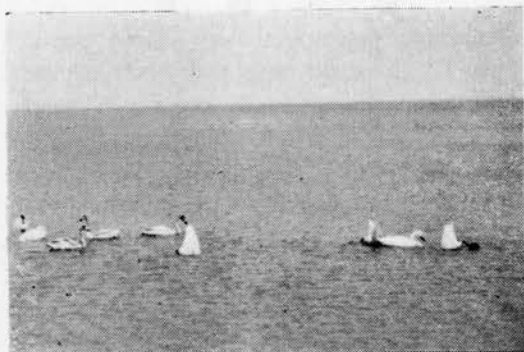
さる1月初旬5羽のハクチョウが数十年ぶりに諏訪湖に姿を見せてまもなくのことである。その中の一羽がカ

モを追うハンターに撃たれ、飛べなくなって波にただよっているのを1月中旬、諏訪の岩本さんが助け数日飼育して「生れ故郷に帰るよう」に諏訪湖に放したがやはり飛ぶことができず、岡谷の漁師山岡さんが傷のためエサをとることさえできないところを再び保護したのであった。諏訪湖には傷ついたハクチョウをかばいながら浮んでいるなかまを見かけた人が多かったという。残された3羽のうちの1羽も、4月18日朝、死体となって岩本さんに発見された。外傷もなく飢え死にしたらしく、体重もめっきり減り、やせ細っていたというからかわいそうな話である。保護された一羽は幼鳥で、色もまだ黒っぽい。元気も次第に回復日増に人にも馴れてきて、エサもよく食べた。羽の傷はたいしたことはなかったが、もう飛ぶことは不可能であった。

たまたま駅前のハクチョウの死を惜しんでいた博物館では岡谷に飼育されているオオハクチョウのことを知り山岡さんをたずね、前のハクチョウの身がわりにともらいうけて飼育することにした。ところが、4月22日、日本野鳥の会諏訪支部長の小平さんから5人が「岡谷でも水鳥園の計画があり、せっかくだかぜひかえしてくれ」と博物館へ要請にきた。オオハクチョウが縁で岡谷に水鳥園の計画がもり上ることは誠に喜ばしいことであり、いづこで飼育され、調査、研究にあるいは観光に利用されることも、愛鳥の気持には変わりない。しかし大町の博物館でもぜひ欲しいという事で、岡谷の申込みを断わったわけである。

今は水禽舎をとこせましとばかり、泳ぎまわっている勇姿を見るにつけ、末長く生きてくれと願わずにはいられない。

(高橋 山博学芸員)



宍道湖に遊ぶオオハクチョウ

登山講座 チロール帽

Tiroler Hut (独)

tirolian hat別名をSeppel Hut単にSeppelとも云う。(SeppはTosephの略) 濃い緑はティロール地方の郷土色で、緑のものが本来のものであります。これにSpielhuhnの羽毛をつけます。村のお祭りその他の催しに、集まる時、この羽毛を立てているのは自分の恋人に手出しする者には、あえて決闘を辞さないという意思表示だといわれます。従って羽毛をねかしているのはこのような決意をもたないということになっております。山のようにとがっているのは山仕事用で、普通のソフト帽のように上が平らなのはお祭り、その他の儀礼用?ということになっています。(福岡孝行記)

クロツグミ

長沢 修介

4月下旬のある晴れた朝、私は寝床の中で夢うつつに「キヨロッコ、キヨロッコ、コケロ、コケロ」となく美しい囀りを聞いていた。突然「クロツグミが来たな」とばかり床を蹴ってねむ気も何処えやら着物のまゝ下駄をつっかけ庭に飛び出して見ると100メートル位はなれた栗の梢にクロツグミが空を向いて歌っていた。毎年この鳥はこの様に突然大声をはりあげて渡ってくる。山村の名歌手の一人で特に大声で囀るので遠方からもそれと知れる。棲息数も多く神社や山村至る所で節まわし面白く美声をはりあげている。又この鳥は自分の鳴き声の中に附近で鳴く他の鳥の声をまねて歌う場合がある。私達がかって居谷里湿原の調査をした折、附近に鳴いているイカルを自分の歌の中に取り込んで面白く節廻しを作っていたことがあった。巣は地上から1メートル~5メートル位の所に作るものが多く多量の苔を利用する私が見たこの鳥の巣の最も大きかったのは神社の栗の

資料寄贈

パン(幼体) 田中信意、ハシボソガラス 川崎修、フクロウ(幼体) 伊藤兼市、イタチ 西沢勇、ハラジロミズナギドリ 高橋達、クイナ 松下保美、アナグマ 北沢源三、カラー写真 東京富士フィルムKK、インガメ 西沢貞重、アナグマ 大町建設事務所、ハイタカ 宗川喜郎、スズガモ(幼体) 富永久、オシドリ 中村実男、ニッコウムササビ 上条静男、ウミスズメ 西沢包彦、貝の化石 倉科孝教、ホシハジロ 羽田健三、土

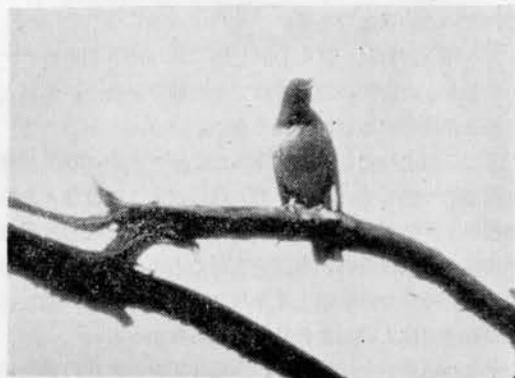
お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

野鳥の声聞をく会行わる

本館主催の野鳥の声を聞く会は去る5月29日、大町市居谷里地籍で行なわれた。

大町駅を4時30分に出発、白々とした夜明け道を15分貸切バスは、オオルリ、キビタキ、サンコウチョウなどのさえずる居谷里水源地に到着、四十数名の人々が、一つ一つの鳥の鳴声やら生態について講師の説明を聞きながら熱心に耳を傾けた。又夜間にしか鳴かない、ヨタカ、フクロウなどの鳴声はあらかじめ録音されている携帯テープレコーダーによって説明がなされた。しかしながら天候が次第にくずればはじめ、小雨降る中に予定より一時間早く8時30分をを終了した。

木の地上5メートル位の所に作ったもので下枝があまりないため木のまたを利用して外側にスキの木皮を少し用いあとは全部コケを利用して外径32センチ×25センチという大きなものだった。下から見るとリスの巣と見間違えう程大きくリスの巣かと思って調べて見たら緑青色の地に淡い紫色と赤褐色の粗い斑点のある卵が真中の4センチ×5センチの小さな産座の中に4個産み込まれていた



師式土器 他関喜美栄 トビ 田中実、コガモ 和沢ゆきよ、土師式土器 宮田二三夫、縄文式土器 青柳三男、ハシボソガラス(幼体) 市森清高、縄文式中期土器 須沢章夫、カルガモ(幼体) 片瀬一登、ヒマルチュリ 登山記録(カラースライド) 日本山岳会 ニッコウムササビ(幼体) 勝野森人、ノウサギ(幼体) 飯島彦正、マガモ 久保村幸雄、ノウサギ(幼体) 塚田重郎、ハイタカ 安川政晴、(敬称略)

山と博物館 第5巻第6号 1960年6月25日発行

発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町

信州印刷大町工場